

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530779

研究課題名(和文) 持続可能な福祉社会における福祉系高校のレリバンス

研究課題名(英文) Relevance of Welfare system High School at Sustainable Welfare Society

研究代表者

岡 多枝子 (OKA, Taeko)

日本福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：30513577

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：福祉系高校のレリバンスに関して、マクロレベルでは生徒の6割以上が卒業時に2つのタイプを選択しており、福祉系高校の創設時に国が企図した福祉専門職の養成に関する成果が示された。メソレベルのレリバンスは、資格取得に関する高校のタイプによって異なっていた。資格校では資格取得を目指して能動的で反省的な実習を行い、福祉就職する者の割合が高く、教養校では福祉の勉強を入学同期に広く福祉の学び、福祉進学する者の割合が高い結果が示された。ミクロレベルでは、職業的レリバンスと教育的レリバンスが見いだされた。

研究成果の概要(英文)：Regarding the relevance of high schools for welfare, a result of nurturing welfare specialists as planned by the national government at the time of the foundation of those schools was demonstrated at the macro level, with 60 percent or more of the students choosing either of the two ways ahead of their graduation. Meanwhile, the meso-level relevance differed depending on each school's stance on the acquisition of qualifications. As shown in the results, qualification-oriented schools conduct active and reflective practical training in an effort for students to obtain qualifications, leading to more students being employed as welfare workers, while refinement-oriented schools provide students with welfare education extensively from the beginning of their study at the schools, resulting in more students advancing to higher welfare education. At the micro level, occupational and educational relevance was identified.

研究分野：福祉系高校

キーワード：福祉系高校のレリバンス

1. 研究開始当初の背景

福祉社会の中核となる福祉専門職の確保が求められる中で、社会保障審議会(2006)において福祉系高校の意義が議論の対象となり、改正「社会福祉士及び介護福祉士法」(2007)の介護福祉士養成ルートのひとつに位置づけられた。

先行研究によると、福祉系高校で学ぶ生徒(本稿では以下、福祉系高校生とする)は、実習を通して高齢者イメージが肯定的に変化する(萩原・名川 2008)ことや、高校時代の福祉教育が卒業後のライフコースに影響を及ぼしている(田村・保正ら 2008)。このように、福祉系高校に関する研究では一定の教育成果が示されている。しかし、これまで福祉教育の当事者である高校生や福祉教育の実践者である教員を対象とした研究、特に生徒の入学動機や学習内容と進路選択については十分に研究されてこなかった。本研究では、職業や教育の研究領域で用いられる「レリバンス(relevance)」(本田 2000)即ち、目的と内容・結果の適合性・適切性という理論枠組みを援用する。本田(2006)は、国際平均に比較して日本の教育システムの特徴の1つは、カリキュラムが、生徒にとって「職業生活や社会生活に意義を持つ、いいかえればレリバンス(relevance)のあるものと感じられている度合いが極度に低い」ことだと指摘している。従来、日本の学校教育において、福祉系高校などの職業高校は、学力において進学校より低位の教育として位置づけられてきた。しかし、青年期の就労問題が問い直される今日、福祉教育が果たす意義を検討することは、福祉系高校創設時(1987)に国が企図した専門教育だけでなく、青年期に福祉を学ぶ意味を検討する上でも重要な研究課題である。

2. 研究の目的

本研究では、「福祉系高校のマクロ・メゾ・ミクロの各レベルにおけるレリバンスとその構造を明らかにする」ことを目的として、以下に、5つの検証命題を立てる。

- (1) マクロレベルにおいて2つのタイプ(福祉就職・進学)は成果をあげているか。
- (2) メゾレベルにおいて資格取得に関する高校タイプ(資格校と教養校)の教育効果の特性は何か。
- (3) メゾレベルにおいて、教員の教育活動の成果と課題は何か。
- (4) ミクロレベルとして、福祉系高校生の目的(入学動機)と内容(授業や実習)及び結果(進路選択)に有意な関連がみられるか。生徒は福祉を学ぶ経験を意義があると考えているか。
- (5) 福祉系高校のレリバンスはどのような要素によって構築されているのか。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の概観により研究課題の明確化を行い、全国の福祉系高校における生徒の進路実績や資格取得、卒業生の就労状況への検討を通してマクロレベルのレリバンスを明らかにする。

(2) 福祉系高校生への質問紙調査をもとに、介護福祉士国家試験受験資格の取得の有無に着目してメゾレベルのレリバンスを検討する。

(3) 教員への面接調査をもとに、生徒の学びや進路選択に対する教員の評価や支援への検討を通してメゾレベルのレリバンスを明らかにする。

(4) 前述の生徒への質問紙調査をもとに、高校への入学動機と実習経験、進路選択に着目してミクロレベルのレリバンスを明らかにする。

(5) 研究の結論を提示する。

4. 研究成果

福祉系高校のレリバンスを総合的に考察し、マクロ・メゾ・ミクロレベルにおける量的及び質的レリバンスの両者の整合性を、以下の通り明らかにした。

マクロレベルにおいては、生徒の6割以上が卒業時に2つのタイプ(福祉就職+福祉進学)を選択しており、福祉系高校の創設時に国が企図した福祉専門職の養成に関する成果が示された。また、この割合は国の調査と一致することでデータの裏づけを得た。

メゾレベルのレリバンスは、資格取得に関する高校のタイプによって異なっていた。資格校では資格取得を目指して能動的で反省的な実習を行い、福祉就職する者の割合が高く、教養校では福祉の勉強を入学動機に広く福祉を学び、福祉進学する者の割合が高い結果が示された。従って、高校タイプに合わせた教育課程の編成が重要である。教員は福祉教育成果の意義を評価して普通教育への拡大が必要だとする反面、生徒の支援に苦慮する現状もみられ、福祉教育を原点から問い直す時期に来ている。

ミクロレベルのレリバンスは、生徒の8割以上が福祉に対する明確な入学動機を持ち、実習を含む学びを通して目的を達成し、9割以上が肯定的な評価をしている。以下に、ミクロレベルのレリバンスに関する量的・質的研究の整合性を概説する。

(1) 「福祉から福祉」の量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「進路に役立つ」、「福祉で働く」、「感動体験」、「理念を確認」などの能動的な実習が高くなっているが、このことを質的研究からみると「学びを通して進路や夢への思いを強め実現できた」ことや「実習が福祉進路の確かな選択を促す」として表現されている。

第2に、量的研究で示された「厳しい現場」

への認識や、実習で「反省した」経験が高い割合を示しているが、質的研究では「困難な現場が自己を鍛えた」という表現に集約されている。

第3に、量的研究の「勉強ができた」、「全体に良かった」との肯定的評価は、質的研究では「専門教育に誇りと自信」を持ったことに示されている。

(2)「一般から福祉」の量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究で「感動体験」が3年で増加しているが、このことを質的研究からみると「実習で心が揺さぶられ」たとして表現されている。

第2に、量的研究で示された「厳しい現場」への認識や実習で「反省した」経験が高い割合を示しているが、質的研究では「苦労の中で普通科にはない特別な学び」や「福祉の現場と意義をリアルに体感」したと表現されている。

第3に、量的研究の「勉強ができた」との肯定的評価が高い割合を示すことは、質的研究では「専門性に関心が高まり福祉進学した」ことに示されている。

(3)「福祉から一般」の量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「進路に役立つ」が85%以上の高い評価を行っているが、このことを質的研究からみると「福祉を人生に役立てたい」として表現されている。

第2に、量的研究で示された「全体によかった」が福祉系進路に次いで高い割合を示しているが、質的研究では「福祉系高校ならではの様々な学びが誇りだ」という表現に集約されている。

第3に、量的研究の「福祉は無理」との否定的評価が高い割合を示すことは、質的研究では「理想と異なる現場にショックを受け」、「自己の適性や限界から無理と見極め」たことに示されている。

(4)「一般から一般」に関する量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「将来に役立つ」という能動的な実習を示す割合が高くなってきているが、このことを質的研究からみると「福祉の学びは将来役に立つ」、「福祉の学びで進路を見極めた」として表現されている。

第2に、量的研究で示された「全体に良かった」との認識が高い割合を示しているが、質的研究では「福祉系高校の学びは充実して」という表現に集約されている。

(5)「未定」に関する量的・質的研究の整合性

第1に、量的研究では「入学を後悔」や「進路に役立たず」などの反省的な実習を示す割合が高いが、このことを質的研究からみると

「しっかり取り組めば良かった」として表現されている。

第2に、量的研究で示された「福祉は無理」との認識が高い割合を示しているが、質的研究では「福祉職は無理だと痛感」したという表現に集約されている。

第3に、量的研究の「勉強ができた」が8割を超えて肯定的評価が高い割合を示すことは、質的研究では「福祉を学んで成長できて良かった」とすることに示されている。

第4に、量的研究の「将来に役立つ」も8割を超えていることは、質的研究からみると「学びを将来に生かしたい」として表現されている。

従って、ミクロレベルのレリバンスは、「職業的レリバンス」、「教育的レリバンス」、「負のレリバンス」から構築され、入学動機や実習経験、進路選択タイプなどによって複雑で多様な要素が見出された。

以上のことから、マクロ、メゾ、ミクロの各レベルにおいて多元的なレリバンスが認められるとともに、各レベルにおいて取り組むべき課題も明らかにされた。

本研究では、福祉系高校生と教員に対する全国的調査をもとに、マクロ、メゾ、ミクロのレリバンスを検討して、実習経験と進路選択の関係を明らかにした。特に、生徒や高校のタイプによるレリバンスの多元性と、職業的及び教育的レリバンスを中核とする福祉系高校のレリバンスの構造を明らかにしたことは、研究の意義が認められる。しかし、本研究では高校3年生のみを対象としており、実習前後の進路選択の変化や実習不安に対する詳細な検討は行われていない。今後は高校1年、2年、3年を経年的にパネル調査することでより正確なデータの検討を行いたい。また、入学動機と実習及び進路選択の推移、卒業後のキャリア形成を連関させた継続調査は、学校から職業への接続や高大接続教育などの視点からも重要であり今後の研究課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 岡多枝子 『福祉系高校の職業的及び教育的レリバンス』(査読有), 東洋大学大学院社会学研究科社会福祉学専攻 博士学位請求論文 2012.7.20, 総頁 153p

2. 岡多枝子 実践報告「社会福祉系大学生の体験的学びとキャリア形成 - 「つながる力」へのアプローチを目指して - 」, p.61-74,

『日本福祉大学研究紀要 現代と文化』第 122 号 (査読無) 日本福祉大学福祉社会開発研究所 2011.01.31

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 岡多枝子 課題別研究「青年期における社会福祉の学び 高大接続」
2014.11.8 日本福祉教育・ボランティア学習学会第20回東京大会
日本社会事業大学(東京都清瀬市)

2. 岡多枝子 課題別研究「青年期における社会福祉の学び 高大接続」
2013.11.16 日本福祉教育・ボランティア学習学会第19回石川大会
金城大学(石川県白山市)

3. 岡多枝子 講演「これからの福祉を担う人間性豊かな人材を育てるために」講師,単著
2011.08.04 全国福祉高等学校長会「平成23年度全国福祉高等学校長会 第17回総会・研究協議会並びに福祉担当教員等研究協議会(東京大会)」
ホテルザ・エルシィ町田(東京都町田市)

4. 岡多枝子「日本における福祉系高校のレリバンス」2011.07.16
第21回アジア太平洋ソーシャルワーク国際会議早稲田大学(東京都新宿区)

〔図書〕(計 1 件)

1. 岡多枝子『青年期に福祉を学ぶ 福祉系高校の職業的及び教育的レリバンス』単著
2015.01.25 学文社, 総頁 208p

〔その他〕

ホームページ等

1. 岡多枝子<テキスト>『Welfare - 福祉 - 』
総頁 76p,単著 2014.04.01 名鉄局印刷株式会社

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡多枝子(OKA, Taeko)

日本福祉大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号: 30513577